

## 内藤先生のQ&A講座 (47号)

### 質問

母が、田舎の実家で一人暮らしをしています。近頃とみに老いが目立ち、病気がちになりました。若い時の元気を覚えているだけに、現実をなかなか受け入れられません。本人も、しきりに「寂しい…」と電話してきます。「こちらに来て同居しないか」と勧めるのですが、家を離れたがりません。

実家は遠く、主人や子どもたちを置いてそうたびたびは母のところに行けません。どうしたものか、途方に暮れています。

### 回答

仮に、今日の問題を「別れ住む親と子」と呼ぶことにします。この問題を抱え、また実際に直面しておられる方は、事情は少しずつ異なりますが、きつと大勢おられることでしょう。ですから、はじめに少し長い目でこれを眺め、いくつかの私の解決策を申し上げてみることに致します。

### 人が移動する時代

今の時代と違い、昔は人の移動することが少なかったと思います。私の小学生時代、40人のクラスのうち半分の方は卒業と同時に農業、商業、製造業など家業を継ぎました。残りのうちの10名は、高等学校(2年間)に進み、上級進学する中学校を受験する人は10名くらいだったのです。生まれた町村

で成長し、教育を受け、親の仕事を受け継ぎ、結婚し、子育て労働、老いを迎えるといった一生を過ごす人は多勢いました。子どもが多いと言っても、それほど遠くない県内の各所に散らばるといった具合でありまして、集まるのも容易だったのです。

今は、生まれたところと教育を受けるところが違いますし、結婚するのも別の場所、仕事や家庭生活も転居があり、それも一度や二度ではありません。日本の国ばかりか、今や世界に移動展開する人が多くなりました。私も米国旅行中に、東海岸の小さな町の郊外で、日本から来られた若い女性に出会いました。彼女は、私の住まいである佐久市の方で、びっくりしたのです。そういうわけで、今や両親とは別に住む若い人々がとても多いのです。質問者のように、老いを迎える親たちのことは、だれもが直面している大きな問題の一つと言ってよいでしょう。

何を隠そう、私自身も77歳を迎えております。長野県に住んでいます。生まれたのは島根県、育つたのは鳥取県、結婚したのは神奈川県、働くために関東各地を転々しました。

娘家族は外国に、働き盛りの息子は東京で子育てと教育の真っ最中でありまして。私もまた、「別れ住む親子」なのです。幸い今のところ、老いたりとは言え、普通に健康で妻も一緒ですから、切羽詰まった状態ではありませんもの、今回の問題の一方の当事者となる可能性はいつでもあるわけです。だから、これは一個人の問題であると言うよりは、確かに社会問題という面があると言つてよいでしょう。日本の社会は、空前の老人社会に突入しつつあります。(以下略)